

福岡教育大学 障害学生支援センター
令和元年度

活動報告書

福岡教育大学 障害学生支援センター

令和元年度活動報告書

目 次

1. 福岡教育大学障害学生支援センターについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2. 令和元年度 障害学生支援センター活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
3. 啓発活動、開催セミナーなど・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
4. 障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査・・・・・・・・・・・・13
5. 障害学生支援センター 令和元年度年間スケジュール・・・・・・・・・・・・21

1. 福岡教育大学障害学生支援センターについて

1-1. 支援体制

福岡教育大学での障害学生支援に関する組織は、平成21年11月に「障害学生支援室」として開設され、平成27年8月から「障害学生支援センター」として発展・拡充し、障害学生支援センターが中心となって、健康科学センター、大学教員、各担当部署、附属学校などと連携を取りながら障害のある学生の支援を行っている。

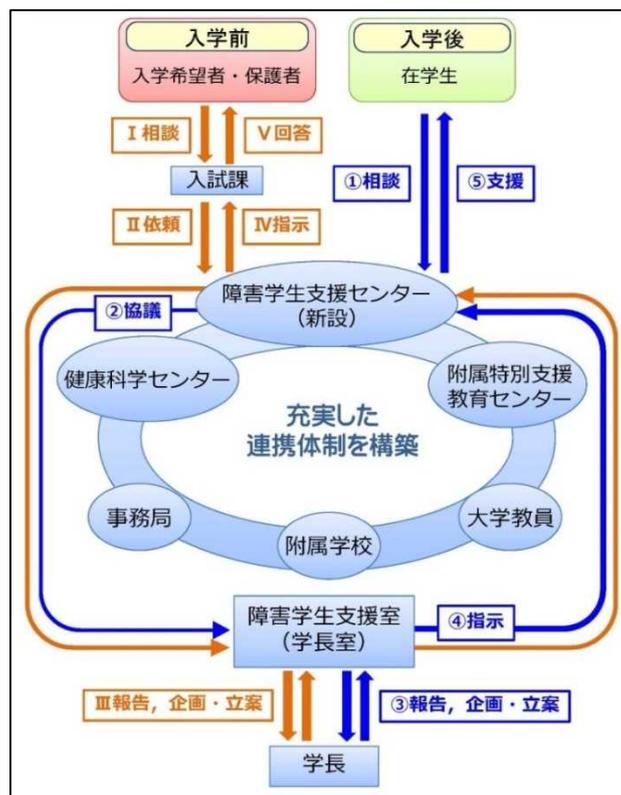


図 1-1 障害学生支援のための連携体制

【障害学生支援センター構成員】

- センター長 1名
- 副センター長 1名
- 専任教員 1名
- 障害学生支援コーディネーター 2名
- 事務補佐員 1名

1-2. 支援学生数

令和元年度に障害学生支援センターの有償ボランティアとして登録した学生は66名であった。平成30年度(53名)と比べると13名増加している。

令和元年度に登録した学生の学年、所属は表1-1の通りである。

表1-1 有償ボランティア学生の学年・所属

学年			所属		
大学院	2年	2	大学院	教育科学専攻 数学教育領域	1
	1年	1		音楽教育領域	1
				家政教育領域	1
学部	4年	17	学部	初等課程	24
	3年	17		幼児教育選修	2
	2年	10	中等課程	国語専攻	3
	1年	19		数学専攻	5
	合計	66名		理科専攻	1
				英語専攻	1
				音楽専攻	2
			美術専攻	2	
			特支課程	初等教育部	13
				中等教育部	10
			合計 66名		

(令和2年3月31日現在)

※表内の数値は人数

1-3. 障害学生在籍数

障害学生支援センターでは、令和2年3月末現在、9名（視覚障害のある学生1名、聴覚障害のある学生1名、病弱・虚弱の学生2名、発達障害のある学生2名、精神障害のある学生3名）の障害学生を支援している。障害種ごとの在籍数は表1-2の通りである。

表1-2 障害学生在籍数

	1年	2年	3年	4年	合計
視覚障害		1			1
聴覚障害	1				1
病弱・虚弱			1	1	2
発達障害	1		1		2
精神障害				3	3
合計	2	1	2	4	9名

※表内の数値は人数

1-4. 障害学生支援センターの利用状況

令和元年度の障害学生支援センターへの来室者数は年間で合計2243名であった（図1-2）。来室目的はパソコンテイク関係での来室が最も多く、その他の目的での来室、手話活動、障害学生支援センターで管理しているパソコンの更新等の作業、各種相談や字幕挿入作業がそれに続いた。

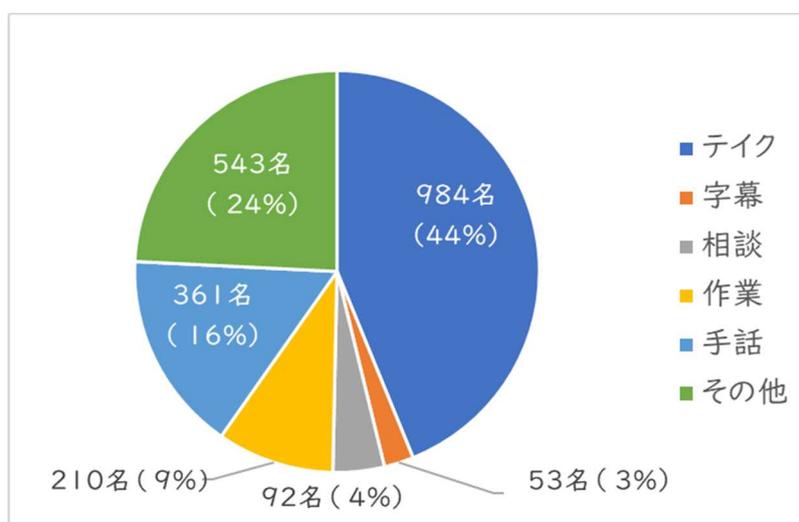


図1-2 障害学生支援センターへの来室者数と来室の目的

2. 令和元年度 障害学生支援センター活動報告

2-1. 視覚障害学生支援

① 授業等の配付資料の電子データでの提供、拡大資料の作成

視覚障害のある学生が授業で使用する配付資料を、授業担当教員から事前に電子データにより提供を受けた。学生は電子データを自身のタブレット端末に取り込み、適宜自分の見やすいサイズに拡大して資料を閲覧する形で受講してもらった。また、視覚障害のある学生から配布資料の拡大印刷依頼があった際は障害学生支援センターで拡大資料を作成し、学生に提供した。

② 支援機器の貸し出し

視覚障害のある学生の希望に応じて貸し出しを行った支援機器を表 2-1 にまとめた。

表 2-1 支援機器（視覚障害学生支援）

拡大読書器（据え置き・携帯型）

単眼鏡、各種ルーペ

各種スキャナ

立体イメージプリンター

各種ソフトウェア

③ 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

視覚障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。具体的には、講義で使用する資料の事前提供、単眼鏡や iPad 等の支援機器の持ち込みの許可、試験時の時間延長の依頼を記載した。

2-2. 聴覚障害学生支援

① 授業での情報保障（パソコンテイク、ノートテイク、手話通訳）

聴覚障害のある学生が希望するすべての授業にパソコンテイク（1コマにつき2～3名）を配置した。利用学生にはタブレット型パソコンを貸し出し、無線LANを使用して教室内の離れた場所においても情報を得ることができる方法を採用している。無線LANで接続することで、自分の受講しやすい場所で受講をしたいという学生の要望に応えた支援を行っている。

また、授業以外の入学式や新入生オリエンテーション、集中講義や実習事前指導・事後指導などの際も、パソコンテイクを2～3名配置した。

令和元年度における聴覚障害のある学生のパソコンテイク配置授業数は、表2-2の通りである。

表 2-2 パソコンテイク配置授業数

	前期	後期
利用学生A	15コマ/週	12コマ/週
利用学生B	14コマ/週	13コマ/週
その他	入学式 新入生オリエンテーション 集中講義 教育実習事前指導・事後指導	

（卒業式は新型コロナウイルス感染症対策のため中止）

② 支援機器の貸し出し

聴覚障害のある学生の用途に合わせた支援機器の貸し出しを行った。パソコンテイクで使用するためのタブレット型パソコンを聴覚障害のある学生1人に1台ずつを年間通して貸し出した。また、音声認識アプリの入ったタブレット端末を聴覚障害のある学生の指導教員に貸し出し、ディスカッションが中心となるゼミの際に使用してもらった。

③ 視聴覚教材への字幕挿入

聴覚障害のある学生が受講する授業で使用する視聴覚教材に字幕を挿入しており、作成した視聴覚教材は図書館で管理している。

令和元年度に字幕挿入した視聴覚教材は合計7本で、233分であった(図2-1, 図2-2)。

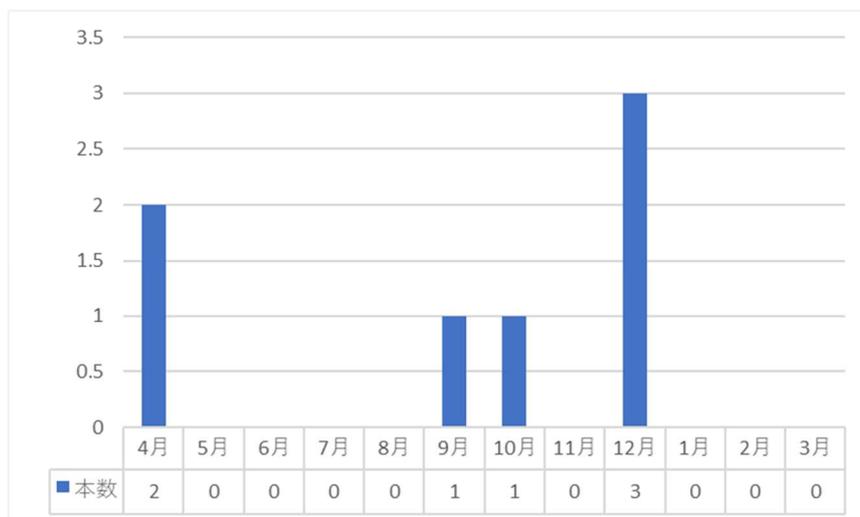


図2-1 令和元年度 字幕挿入依頼本数

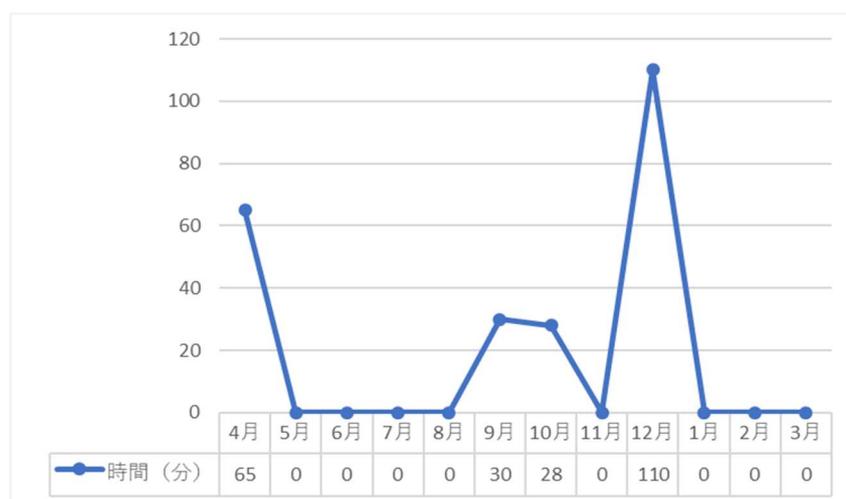


図2-2 令和元年度 字幕挿入時間

③ 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

聴覚障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。具体的には、視聴覚教材を使用する際の事前申請、パソコンテイクの配置およびパソコンテイクへの資料提供の依頼を記載した。

⑤ 式典での情報保障

式典において、聴覚障害のある学生だけでなく、式典に参加される保護者等のためにパソコンテイク(支援学生)を配置し、スクリーンに文字情報として投影している。また、福岡県手話の会連合会に手話通訳者派遣の依頼をし、パソコンテイク・手話通訳により、誰もが式典の内容を理解できるような情報保障を行った。

2-3. 病弱・虚弱学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

病弱・虚弱の学生が受講する授業の担当教員に対して、病弱・虚弱の学生の症状・ニーズに合わせた、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

2-4. 発達障害学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

発達障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

② 時間管理・持ち物管理スキル支援

発達障害のある学生のニーズに合わせて定期的に面談を行い、スケジュールの確認や持ち物の管理スキルの支援を行った。

2-5. 精神障害学生支援

① 授業担当教員に対する授業の際の配慮願いの送付

精神障害のある学生が受講する授業の担当教員に対して、主な配慮点をまとめた文書を送付した。

2-6. 支援登録学生対象入門講座

障害学生支援センターでは、支援スタッフとした登録した学生に対して、入門講座を行っている。入門講座は1講座あたり1時間半程度で講師は支援スタッフとして登録して実際に活動している学生が担当している。令和元年度のノート・パソコンテイク入門講座、視聴覚教材字幕挿入入門講座の実施回数および人数は以下の通りである。

○ノート・パソコンテイク入門講座 18回

1回の講座に1~3名程度の学生が参加し、合計21名の参加があった。

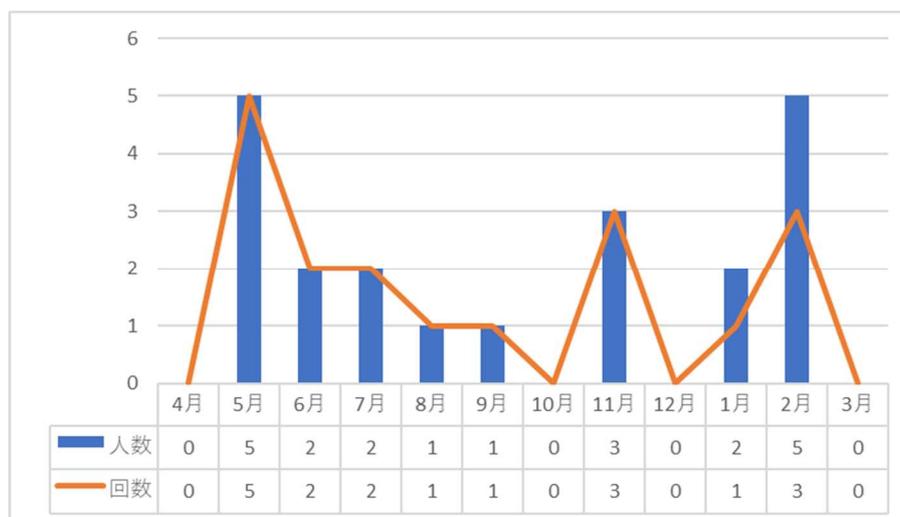


図 2-3 ノート・パソコンテイク入門講座実施回数・人数

○視聴覚教材字幕挿入入門講座 15回

1回の講座に1~3名程度の学生が参加し、合計25名の参加があった。

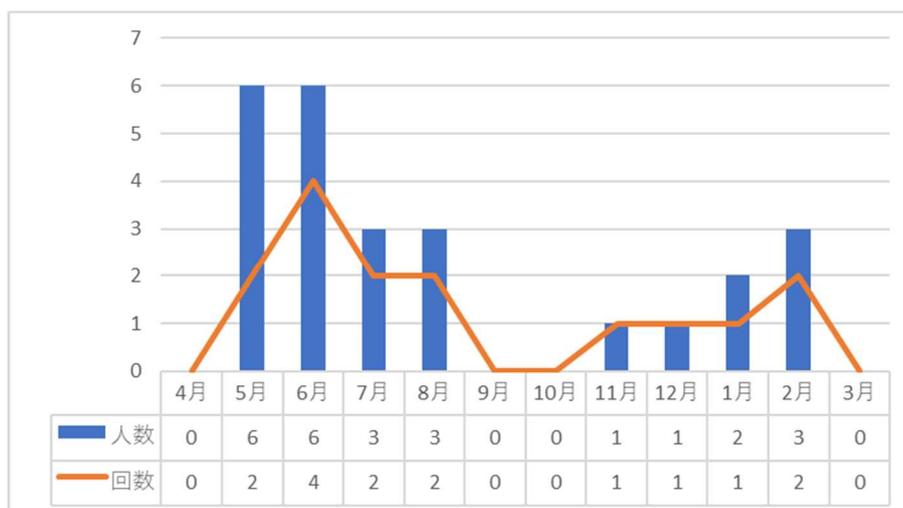


図 2-4 視聴覚教材字幕挿入・入門講座実施回数・人数



写真 2-1 パソコンタイク入門講座の様子

2-7. 支援活動反省会

前・後期終了後に2回、支援活動の反省会を開催し、その学期に行われた支援活動に関する反省や支援をする際に難しかったこと、その改善点などについて意見交換が行われた。反省会では支援スタッフ同士でのアドバイスがなされる一方で、実際に支援を受けている障害のある学生も参加しているため、「自分だったらこうして欲しい」など、障害のある学生自身の経験やとらえ方を話してもらえる場面もあり、次年度以降の支援活動の改善につながっていくものと考えられる。

また、パソコンタイクの技術向上を目的としたタイピングチェックを適宜行い、パソコンタイカーとして登録した当初とタイピング力を比較することで、技能が向上していることを実感し、支援活動への意欲が向上する学生が多い。また、学生の意識が高まることによって、よりタイピング技能が向上すると考えられる。



写真 2-2 反省会の様子

2-8. バリアフリーマップの作成

平成26年度より支援スタッフによる大学内のバリアフリー状況調査およびバリアフリーマップの作成を行っている。令和元年度には、これまでに調査が十分に行われてこなかった箇所に加え、改修工事によって新たに必要になった箇所の調査やマップの改訂作業を行った。調査を元に大学内のバリアフリー化が行われており、令和元年度には側溝へのグレーチングの設置や不要な点字ブロックの除去などを行った。また、作成されたバリアフリーマップは、学内各課へ配布し、入学式の際に新入生全員に配布され、障害学生支援センターのホームページ上にて随時更新している。



写真 2-3 バリアフリー状況調査の様子

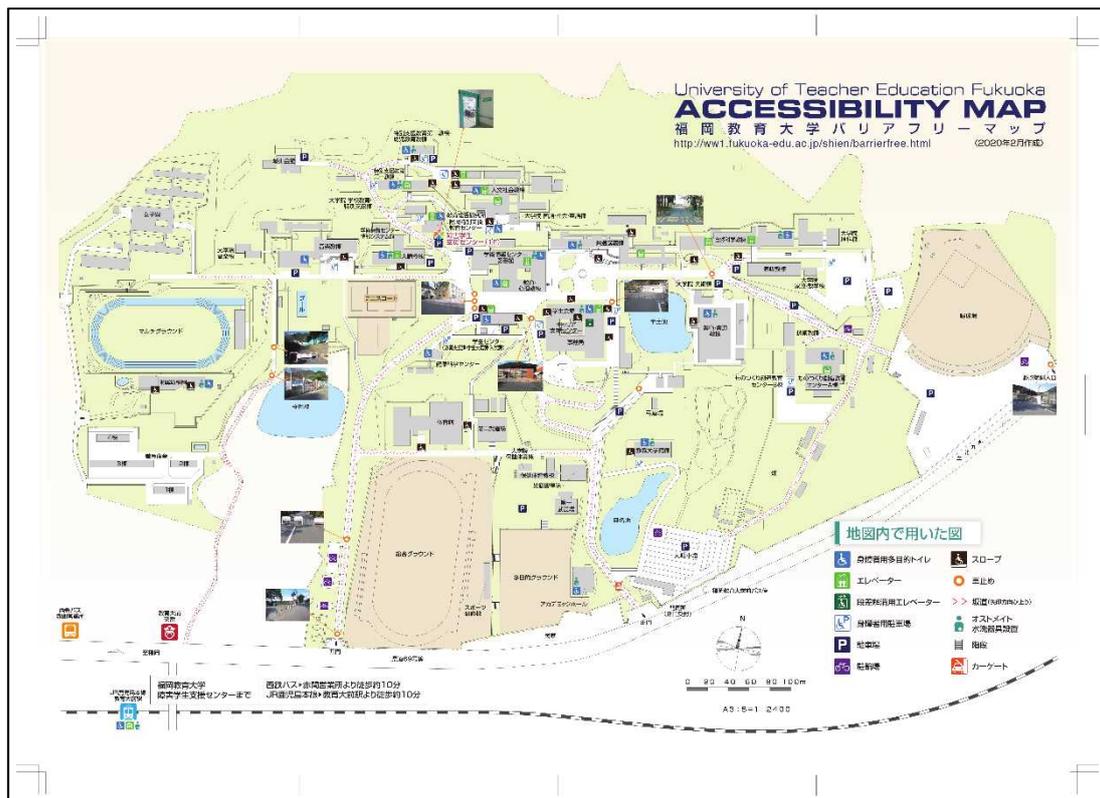


図 2-5 学内バリアフリーマップ

2-9. しゅわ弁

学生が企画する手話の勉強会（しゅわ弁）を毎週木曜日の昼休みに開催した。講師となる学生がプログラムを考え、令和元年度は、回ごとにテーマを決め、テーマに沿った手話表現を使ってコミュニケーションをとるなどの活動を行った。毎週8～10名程度の参加者があり、熱心に手話でコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。



写真 2-4 しゅわ弁の様子

3. 啓発活動、開催セミナーなど

3-1. 障害学生修学支援ネットワーク拠点校としての活動

福岡教育大学は独立行政法人日本学生支援機構障害学生支援ネットワーク九州・沖縄地区の拠点校として、障害のある学生に関する相談・見学の申し込みを受け付け、情報提供等を行った。

他大学等からの相談受付 6件（大学6件）

見学 7件（大学1件、行政2件、その他4件）

3-2. 第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム・総会

令和元年11月23日（土）～24日（日）

大阪大学コンベンションセンター

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）主催の第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムが開催され、職員1名が参加した。

4. 障害学生支援に関する授業担当教員アンケート

4-1. 実施の目的

今後の障害学生支援活動の充実や方向性を検討するため、障害のある学生が受講する授業の担当教員へアンケート調査を実施し、障害学生支援センターで提供している合理的配慮や取り組みの有効性について検討した。

4-2. 方法

令和元年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害のある学生が受講した授業の担当教員 104 名（常勤 69 名、非常勤 35 名）を対象に、令和 2 年 1～2 月にかけて、郵送によるアンケート調査を実施した。そのうち、36 名から回答を得た（回収率 34.6%）。なお、回答者は常勤教員 25 名（36.2%）、非常勤講師 11 名（31.4%）であった。

4-3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

「問① 担当した授業（障害のある学生が受講した授業）について」

担当した授業における障害のある学生の障害種（複数回答）を尋ねたところ、視覚障害 11 件（23%）、聴覚障害 15 件（31%）、肢体不自由 2 件（4%）、病弱・身体虚弱 8 件（17%）、発達障害 6 件（13%）、精神障害 3 件（6%）、障害名不明 3 件（6%）であった（図 4-1）。

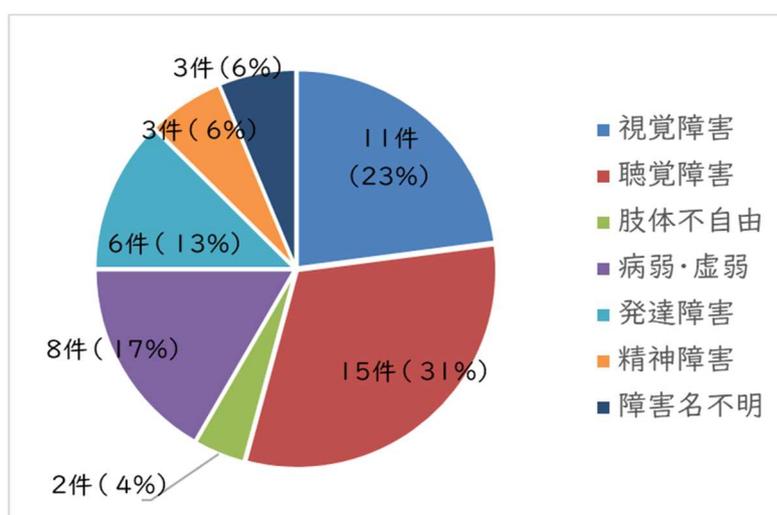


図 4-1 支援件数とその割合

授業を担当している障害のある学生へ行った配慮について、選択するように求めた結果を図 4-2～図 4-5 に示す。

視覚障害のある学生への配慮として「教材の拡大（11 件）」が最も多く、「教材のテキストデータ化（2 件）」、「その他（2 件）」と続いた（図 4-2）。

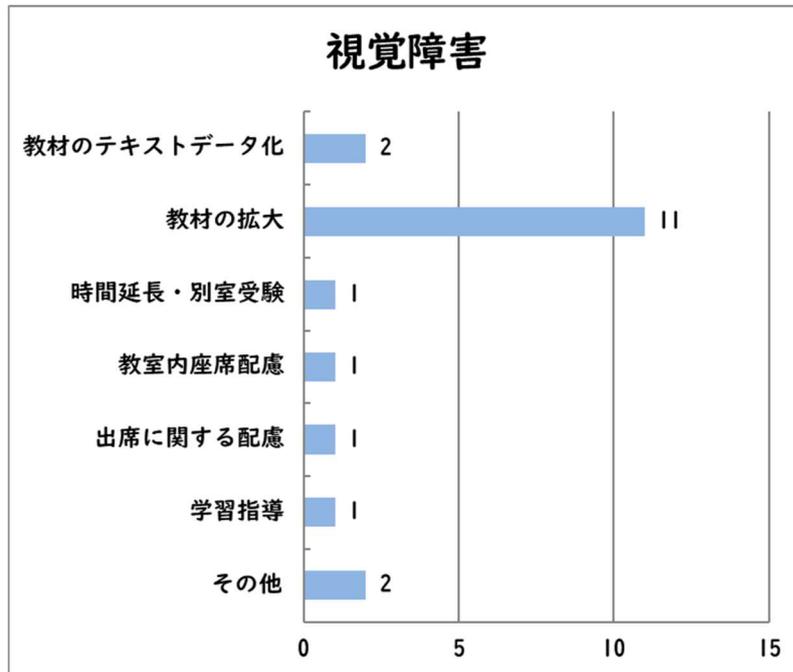


図 4-2 視覚障害のある学生へ行った配慮

聴覚障害のある学生への配慮では、「ノート・PC テイク（13 件）」が最も多く、続いて「その他（6 件）」「視聴覚教材字幕付け（5 件）」と続いた（図 4-3）。

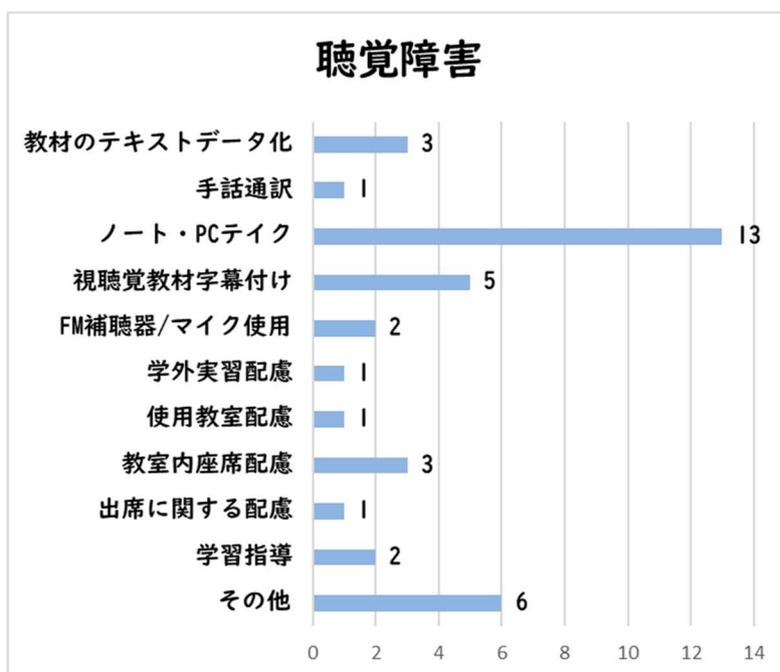


図 4-3 聴覚障害のある学生へ行った配慮

発達障害のある学生への配慮として「教材の拡大（3 件）」「その他（3 件）」が最も多く、「教材のテキストデータ化（1 件）」「ノート・PC テイク（1 件）」「TA 等の活用（1 件）」「出席に関する配慮（1 件）」と続いた（図 4-4）。

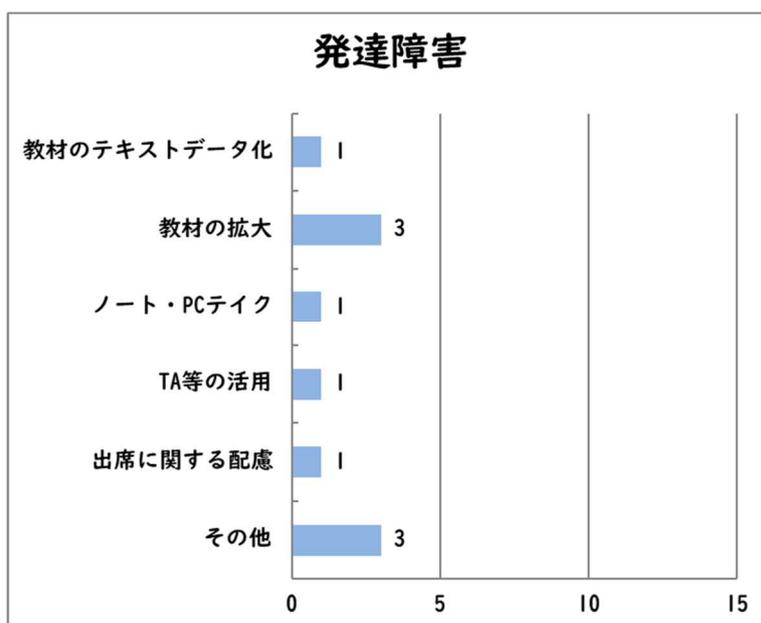


図 4-4 発達障害のある学生へ行った配慮

病弱・虚弱の学生、精神障害のある学生および障害名が分からないと授業担当教員より回答のあった学生に対する配慮を図 4-5 に示す。

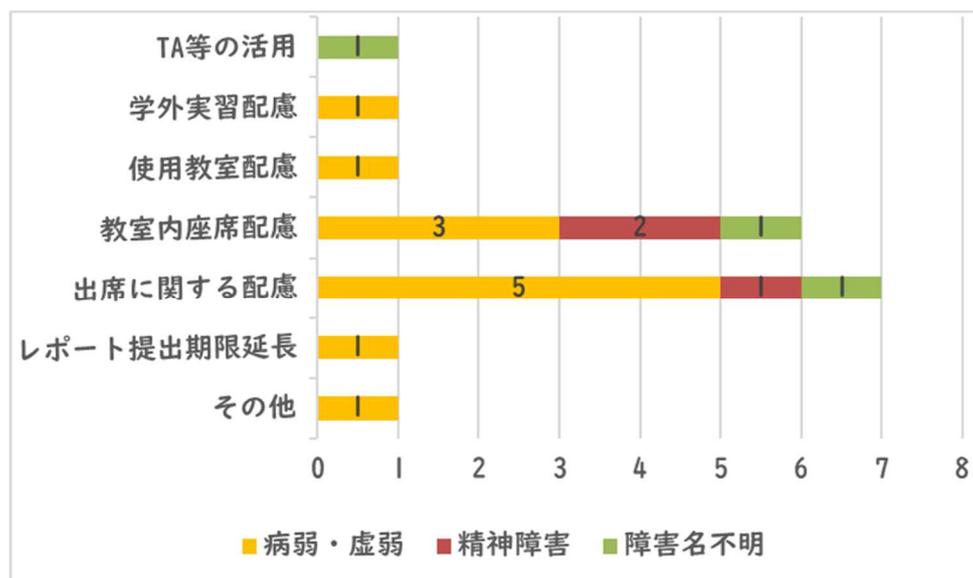


図 4-5 病弱・虚弱の学生、精神障害のある学生および障害名不明の学生へ行った配慮

以上の結果から、視覚障害のある学生および発達障害のある学生への配慮としては「教材の拡大」の件数が多く、聴覚障害のある学生への配慮としては「ノート・パソコンテイク」「視聴覚教材字幕付け」が令和元年度は最も件数が多かった。また、「教室内座席配慮」「出席に関する配慮」については障害種に関わらず全体的に行われた。

「問② 障害学生支援センターが提供している支援（パソコンテイク、字幕挿入、情報提供等）は適切であったと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図4-6のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が19名、「少しそう思う」という回答が5名と、障害学生支援センターで行っている配慮に一定の評価が得られたと考えられる。

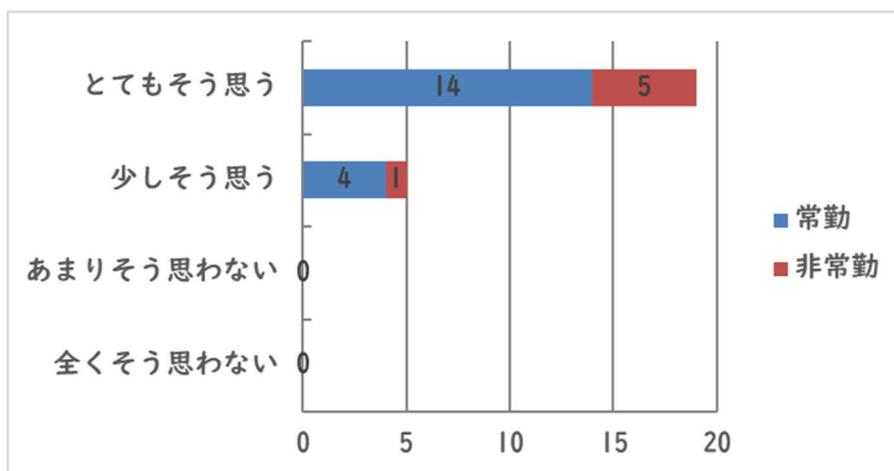


図4-6 障害学生支援センターが提供した支援は適切だったと思うか

「問③ 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図4-7のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が7名と最も多く、次いで「少しそう思う」という回答が16名であった。これらの結果から、障害学生支援センターで提供する配慮は、授業の目標を達成するために十分なものであったと考えられる。その一方で、自由記述からは、学生への配慮は出来たところと出来ていなかったところ両方あると思うという意見もみられた。

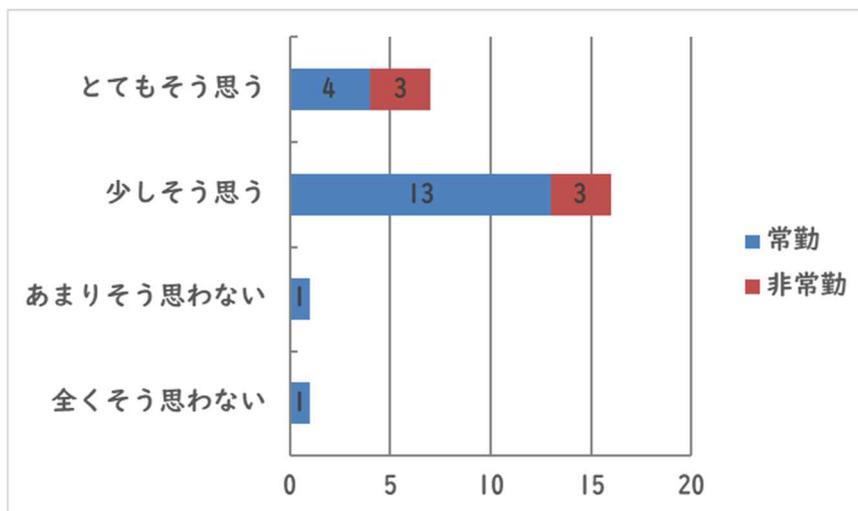


図4-7 障害のある学生への配慮は授業の達成目標という観点から見て十分だと思うか

「問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図4-8のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が6名、「少しそう思う」が12名であった一方、「あまりそう思わない」と回答した人数は5名、「全くそう思わない」と回答した人数は1名であった。

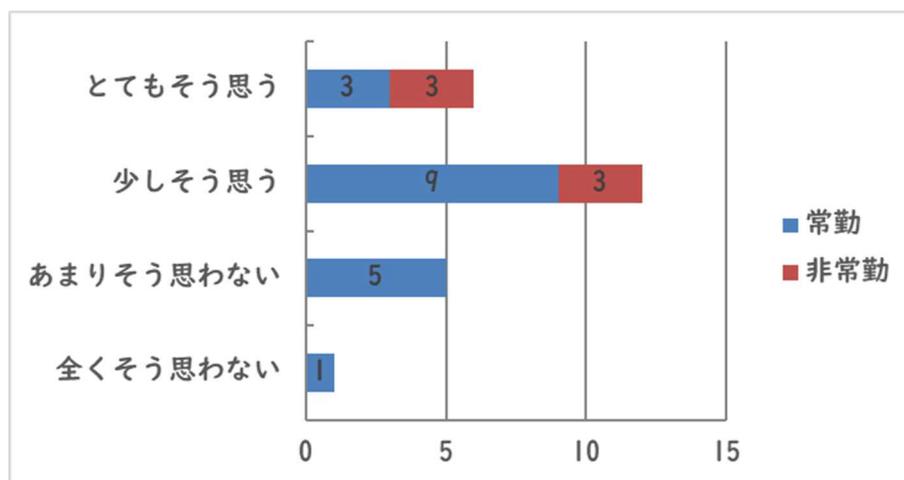


図4-8 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思うか

「問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていくうえでFDが必要だと思いますか。」

上記について尋ねたところ、図4-9のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が9名、「少しそう思う」が13名、「あまりそう思わない」が1名であった。自由記述の回答では「とてもそう思うが対応は大変」「必要だと思うが一般論で終わってしまいそう」などの意見もあった。

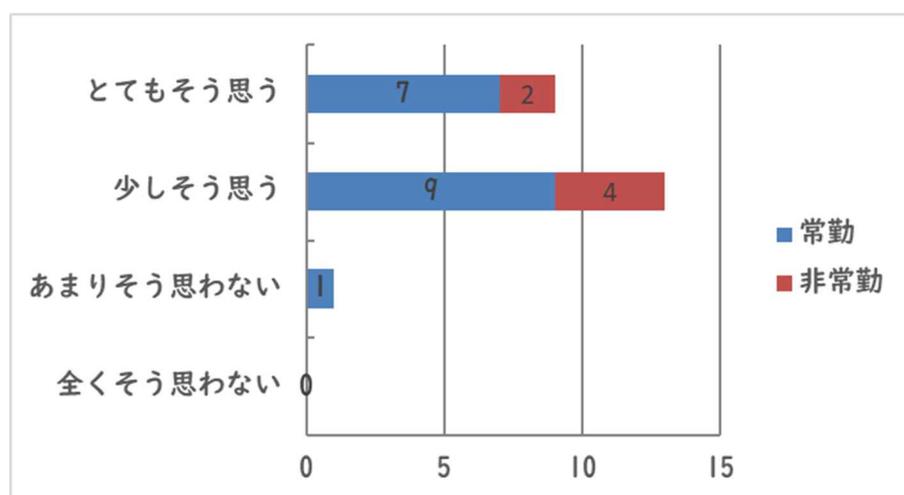


図4-9 障害のある学生へ授業を行っていくうえで、FDが必要だと思うか

「問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたってうまくいかなかった授業はありますか。」

上記について尋ねたところ、図4-10のような結果が得られた。回答者全体で見ると「毎回あった」が1名、「しばしばあった」が3名、「たまにあった」が9名、「全くなかった」が11名であった。授業を行うにあたってうまくいかないことがほとんどなかったと考えている授業担当教員がいる一方、うまくいかなかったと感じている教員も一定数存在した。このことから、障害学生支援センターと授業担当教員が密に連携を取りながら、配慮内容を検討していく必要性が示唆された。

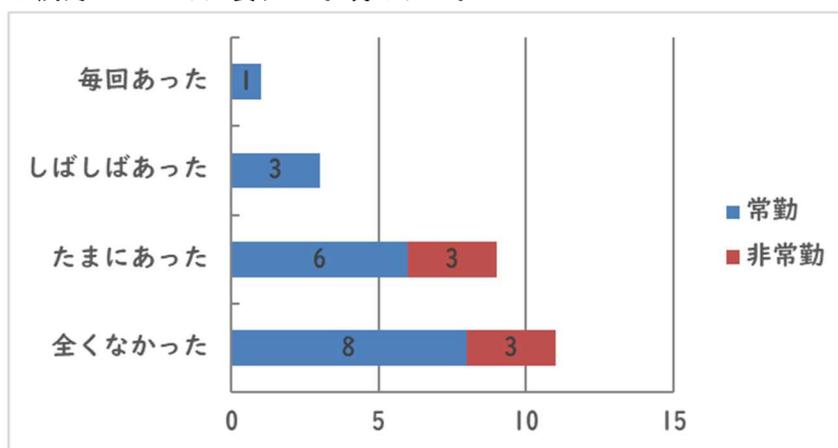
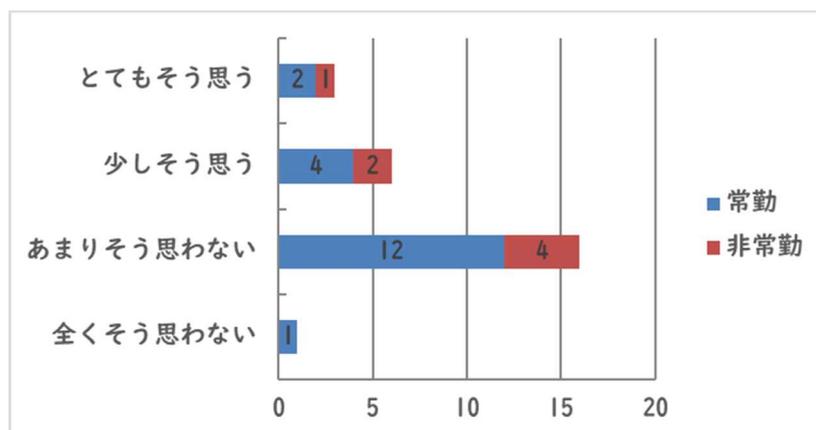


図4-10 障害のある学生の支援を行うにあたって、うまくいかなかった授業があったか

「問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたいと思いますか。」

上記の問いに対して、図4-11のような結果が得られた。「とてもそう思う」が3名、「少しそう思う」が6名、「あまりそう思わない」が16名、「全くそう思わない」が1名であった。学生に対して授業の初めに配慮依頼文書を説明するよう指導を行っているものの、「あまりそう思わない」という回答が最も多く、意思表示のための支援の必要性が示唆された。



問4-11 障害のある学生が自分に必要な配慮事項を能動的に伝えていたか

「問⑧ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。」

上記について尋ねたところ、図4-12のような結果が得られた。「とても思う」と回答した教員が22名、「少し思う」が5名であり、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」が0名であった。障害学生支援センターより送付している、障害のある学生への配慮依頼文書について、授業担当教員より概ね理解が得られたと考えられる。

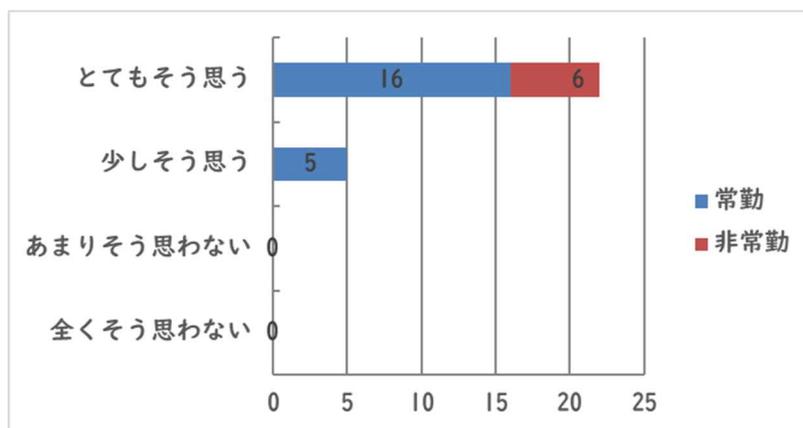


図4-12 配慮依頼文書は十分に理解できたか

本アンケート調査の結果をふまえて、授業担当教員と障害学生支援センターで支援方法についての情報共有、及び連携の必要性が状況に応じて求められる。また、授業担当教員に対して合理的配慮の内容を本人が説明するなど、意思表示のための支援も行っていく必要があると考えられる。さらに、障害学生支援センターが提供している支援を継続していくため、PC テイクや字幕挿入のスキルを次世代につなぐための入門講座及びスキルアップ講座の開催や、障害種に合わせたサポートも引き続き行っていく必要がある。

5. 障害学生支援センター 令和元年度スケジュール

平成31年4月～令和2年3月

平成31年			
4月	3日		入学式にて 手話通訳（福岡県手話の会連合会）、PC テイカー（支援学生）派遣 オリエンテーション期間（新入生サポート対応・支援学生募集） オリエンテーションにてPC テイカー（支援学生）派遣 前期授業配慮願い作成・提出
令和元年			
5月	中旬		フレッシュマンセミナーにて障害学生支援センターについて周知
6月	28～30日		AHEAD JAPAN 第5回大会（参加：職員1名）
7月	20日		オープンキャンパスにてPC テイカー（支援学生）派遣
8月	29～30日		障害学生支援実務者育成研修会：基礎プログラム（参加：職員1名）
9月	16日		日本教育心理学会第61回総会（ポスター発表：教員1名）
	17・18日		障害学生実務者育成研修会：応用プログラム①（参加：職員1名）
	中旬		利用学生の前期授業の振り返り及び後期授業に向けた配慮内容の聞き取り
10月	21～23日		日本特殊教育学会第57回大会（ポスター発表：教員1名）
	19日		特別支援教育公開セミナーにてPC テイカー（支援学生）派遣
11月	23・24日		第15回 PEPNet-Japan 日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム・総会（参加：職員1名）
12月	6日		九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携情報交換会（参加：教員2名 職員1名） 長崎大学「障害学生の就労に関する公開講演会」にてPC テイカー（支援学生）派遣
	10日		障害学生実務者育成研修会：応用プログラム②（参加：職員1名）
令和2年			
1月	下旬		「障害学生支援に関する授業担当教員アンケート調査」実施
2月	4日		産業医科大学FD研修会（講演：教員1名）
3月			*九州地区国立大学法人障害者支援に関する大学間連携プログラム ⇒新型コロナウイルス感染症防止のため中止 *卒業式・修了式 ⇒新型コロナウイルス感染症防止のため中止